

緋弾のアリア～除外された武偵～

禾口爻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

武偵とは……って言ってもこれを読まれる方は、もうご存知ですよね？まあ、説明は省きます……だーゲフンゲフン何か聞きましたか？あ、聞いてない？ならいいです

さて、この物語はある悲惨な武偵がなんやかんやする物語です……ん？なんやかんやじゃ分からない？まあまあ、書く側も分かりませんが……ん？なんやかんやいし作者がわからんでどうする？って、いやだって方向性全く決めてませんから訂正したりもしますよ？という事で、方向性不明で不定期で更新する物語の始まりです。

目次

番外編

番外編 明けましておめでとうござい

ます | 1

武偵殺し

残弾 1 | 6

残弾 2 | 12

残弾 3 | 17

残弾 4 | 22

残弾 5 | 28

お詫びと報告 | 31

番外編

番外編

明けましておめでとうございます

やあ、百地？ことハミルトン・ホームズだ。今日は、キンジの部屋に集まつてる。

「百地君、お醤油どこ〜」

「ん？そのこの棚に入ってるはずだが……どこを探したの星伽さん……」

「(ハハ)？」

と指差したのは、フライパンなどを仕舞つてる棚だった。

「いや、調味料はこっち」

俺は、食器棚の下にある引き戸を開け醤油を取り出した。

「はいよつと、ほんじゃ俺はアリア嬢を連れて来ます」

「うん！ありがとうね百地君！」

あー、まだ本編では知らないんだよなあ……まあ、これ番外編だしいつか。

「ああ、おーいキンジー」

「ん？なんだ？」

「アリア嬢を連れて来るから、準備してけよ？」

「ああ、了解……きいつけてな？」

「わかってよ、ほんじゃ」

さて、アリア嬢には昨日メールしてあるから居るだろ……多分……

「おっそいわねー、あいつ……」

「お嬢様、御迎えに参りました」

「遅い！ 一体、何行待たされなきやいけないのよ！」

（あ、さーせん）

「（今の）誰だ（よ）」

（儂だよ、禾口爻だよ……なに？ 忘れちゃったのー？）

「えーっと、あんた本編出てないわよね？」

（そうだけど？ いやだって、出てないじゃなくて出たくないが本音だね）

「はあ……そうでしたか……怖いんだが……ボソ」

（偽名君、そんな事言っちゃアカンよ？ よし、君にお年玉だよ！）

「ん？ それは、武器か？」

（いんや、君の主）

「……アリア嬢、さ、お車へ」

「え？ちよ！作者、無視していいの!？」

「いいのです、さあ、行きましようか」

(作者権限！メヌちゃん！愛しの執事君が、居るよおお！)

「な、なんですか！その作者権限って！」

「作者のみ与えられる、権限の事ですわよ？ハミルトン？」

「……お、お久しぶりですね……メヌエットお嬢様……」

「そうね、元気にしてましたか？」

あ、殺されるとハミルトンは心の中でそう思った。

「あら、メヌも来るの？」

(ん？いや、アリアさんだけドレゲフンゲフン、キンジの所に行ってもらいます)

「ちよ！作者！お、俺はどうなるんだああ！」

(メヌちゃんくお家で、ハミルトンと仲良くね)

「ええ、ありがとうございます……作者……」

(ん？ああ、気にしないでいいよ、てか、さんでよろしく)

「うふふ、さて、参りましようか……ハミルトン？」

「ぎよ、御意」

作者めえええ！と、心の中で叫んだが誰にも「聞こえて」なかった。

(うん、やっぱこう言う展開っていいね)

それでは、と作者は消えてあとに残ったのは……

「さて、お姉様と作者さんは居なくなってしまったので……ハミルトン、私し達も、行きましょ?」

「……見心のままに……」

そして、ぎゃああああ!という叫び声が木霊した。

「よし、皆様そろいましたね?」

「ああ、つていつても5人しか居ないけどな」

「そこは、仕方がないよキンちゃん」

「そうだな」

「てか、キンジ。日本のお正月の挨拶って何?」

「ああ、若者の間では『あけおめ!』って言ってるが……あれ、略なんだよな……」

「明けましておめでとう御座いますが、無難ではないかと……」

「あら、ハミルトンって日本のこと知ってるのね」

「こちらに来る前に、勉強しましたので……メヌエットお嬢様」

「うふふ、では挨拶と参りましょ?」

「それでは、皆様準備はよろしいですか？」

「ああ」

「大丈夫だよ、百地君」

「私達も、大丈夫よ、ね？メヌ？」

「ええ、準備は整ってますよ？」

「わかりました、では！」

「一二三(新年) 明けましておめでとう御座います」「一二三」

今年も、『緋弾のアリア』除外された武偵をよろしくお願ひします！

by 禾口爻

武偵殺し

残弾 1

ジリリリリ！つと、目覚し時計の音で目が覚めた。

「朝……か……」

ムクリと起きて、目覚しを止めて伸びをした。

「くうー！……さて、今日も生きますか」

え？なんで、その漢字かって？いや、なんとなく？まあ、顔洗ってきますか。

（ピーンポー……）

「誰だ、こんな朝早く……って、こいつの幼馴染かな？」

こいつこと、遠山金次は今幸せそうに寝ているルームメイトで、今インターホンを鳴らしたのがこいつの幼馴染、星伽白雪……ん？俺の名前か？ああ、すまない言いそびれたよ。俺の名前は百地ももち？っていう……さて、あまり外で待たせるのは良く無いから鍵開けてこようか……

「やあ、おはよう星伽さん」

「あ、おはよう御座います。百地君」

「奴なら、まだ寝てるから起こして来たら？」

「あ、うん。そうだね」

そう言つて、星伽さんは寢室で寝ている遠山幸金次者を起こしに行つた。

ん？俺はどうするかつて？顔洗つたら学校に行くが？

「さてと、着替えてとつとと行きませうかな」

そうと決まれば、行動行動つと

「それじゃ、俺は先に行つて来ますから」

「うん、わかつたよ百地君」

未だ、キンジの寝顔を見ていた星伽さんに一言つて俺は、寮を出た。

…

…

…

まあ、先に寮を出たのはそうした方が面白いからそうしたままだ。……というのは冗談だ、学校に転校したから早めに行つて担任とクラスを教えて貰うためだ。

「この時間帯は、空いてるかな……」

そう呟いて、寮の近くに借りてる駐車場に向かった。なんで、駐車場かつて？車を駐

めてる以外何があるかな？

ん？歳いくつか？もう18だが……何か……

「さて、行きますかな」

そして、長い一日の始まりだった。

道は、空いていて走りやすくて渋滞にはまらずに学校に来れた。だが、問題が発生した。

「駐車場……何処だ……」

学校に入る前に気付いて、校門前で駐めて話せそうな人を探したが、ある視線が気になった。

「誰だ？」

こちら……というか、車を凝視している男子生徒と目があった。え、なんでこっち来るの？なんで？そうこうしてる間に、窓ガラスをコンコンされたので少しだけ開けて

……

「な、なにか？」

「お前……車で来たのか……？」

「え？駄目なのか？」

「いや、駄目じゃないけど車で登校する奴初めて見たからついな……」

ああ、なるほど……まあ、日本じゃ珍しいか……

「まあ、そうか……なあ、駐車場は何処にある？」

「おいおい、知らないで来たのかよ……」

「わ、悪いかよ……それで、何処だ？」

「（一旦）ハア……武偵が武偵になにk「報酬は、駐車場まで乗せてやる」わかった、それでいいぜー」

「ほんじゃ、カーナビよろしく」

「いや、カーナビちげえし……轆くぞ？」

「すまんすまん、俺は百地？だ」

「よろしく?!俺は武藤剛気だ」

その後、駐車場に案内してもらいそこで別れた。

ついでに、教務科の場所も教えて貰った。

コンコンと、ドアをノックしてあげた。

「転校生の百地？です、挨拶をしに来ました」

「おー、来たかこっちやー」

失礼しますと言って、返信をした先生の元へ行った。

「へえー、お前が百地？か……ちゃんと、飯くってるんかー！」

「た、食べてますから！てか、痛いですよ！先生！」

先生が居るところにいったら、肩をバシバシ叩かれた。

「あ、自己紹介がまだだったか……お前の担任の蘭豹だ」

「よろしくお願いします」

「ああ、よろしく〜」

「それで、用とは？」

「ん？ああ、選択科目の事聞き忘れていたからな」

いやいや、忘れちゃアカンでしょ！

「あー強襲科アサルトでいいですよ」

そう答えたら、周りの先生が（？）ってなった……え？なんで？

「ぶ……く……く……あははははは！」

そして、爆笑している蘭豹先生……なんか間違えたのかな？

「えっと、先生なんで笑ってるのですか？」

「アハハ……ハア……いや、だってな飯を注文する感じで言われちゃあな……プクク

……」

「……」

なんとも、答えづらかった……だって、『あの人』と一緒にだったからな……

「あー、すまんすまん、普通は、悩むとかするのにあっさり言われちゃあな」

「いえ、お気になさらず」

「にして、日本語うまいな……教えて貰ったのか？」

「先生も武偵ですよね？なら、調べたら早いのでは？」

「そうだったな、執事君？」

「ご存知でしたか……」

「情報戦は、武偵の基礎やろ」

「そうでしたね……」

「さてと、ほんなら教室に行くぞーついて来い」

「……畏まりました」

ついそう言ってしまった。

そして、俺がこんなやりとりしてる間キンジが、事件に巻き込まれていたの知らなかったのと『あの人』も来ているのも予想していなかった。

残弾2

教室に、行く途中に注意事項などを説明して貰ってた。

「ということだが……何か質問とかあるか？」

「いえ、特に『これ』というのは無いです……ん？」

「ん？何かあるのか？」

「いえ、ルームメイトが見えたので」

「そうか、ほんじゃ教室につくから私が呼んだら入ってこい」

「わかりました」

という会話をして、先生は教室に入ってしまった。……入る前に、銃声が聞こえたがキ

ニシナイ。

(さて、自己紹介はどうするか……よし、いい感じにドアが開いてるし『あれ』を使うか

……(？ー?) ニヤリ

「よし、ほんじゃ転校生を紹介する……おーい入ってこーい」

……

「ありや？来ねえなー」

「……はい、なんででしょうか？」

「ツ!!い、いつから其処に居た!？」

「『おーい』のところで、入って来ましかだ？」

それが何か?と言った感じに、聞き返した。

「お前は、校長かよ……あー心臓にわりいな」

「すみません、呼ばれる前に来るのが当たり前だったので……」

「そ、そうか……でもなあ!今度から普通に入ってこい!」

「普通……ですか……面白みが無いじゃありませんか」

残念そうに、答えた。

「では、ポカーンと口をアホみたいに開けてる皆様、どうも初めまして百地?です。選択

科目は強襲科です、では、以後よしなに」

「えーつと、席は……窓側の一番後ろだが……そこで、いいか？」

「ええ、大丈夫です」

ああ、と思い出した感じにこう言った。

「質問は、一切受け付けないので」

と言い、席についた。

その後、昼休みまで滞り無く進み昼休みになったらキンジが来た。あー、朝の事根に持ってるのかな？

「やあ、キンジどうかした？」

「ああ、どうかしたよ……よくも、置いて行きやがったなコンチクショウ」

「ああ、何かあつたんだね？」

「そうだよ！あつたよ！色々とね！」

「まあ、その辺の事は食べながらね」

そうかいと、トボトボと一緒に屋上に向かった。

「それで、何があつたの？」

「ああ……起きたら目の前に白雪の顔があつた……」

「……んぐ、それで？」

「バスに乗り遅れて、チャリで行ったらジャックにあつた……」

「チャリジャックか……『武偵殺し』か……ボソ」

「ん？なんか言つたか？」

「いや、なんでも無い……続けてくれ？その後が、あるんだろ教務科に行つてたって事は」

「なんで知ってるんだよ……ああ、あつたよ……」

「へえ……」

「今、助けてもらった女子生徒に追われてる……」

「ぶっはあ！な、なんだそれ!？」

「きつたねえなあ!?!おい!?!てか、知らねえよ俺だつて!」

「ああ……すまない、取り乱した……それで、なにした?」

「何もしてない……俺は無罪だ……」

「そうか……ん?」

「?どうした?」

「キンジ、隠れるぞ」

「は?なんで?」

「お前が、嫌いな奴らだよ」

ああ、とキンジは頷いて死角に隠れた。

(な、なあどうするんだよ……)

(まあ、なんとかなるよ……じゃ)

(?じゃ?おいしいいい!俺を置いて行くんかあああ!)

(うん)

コソコソと話てる間に、少しずつ気配を消していく。

(じゃ、頑張つて)

(いやいやーって、あれ？ど、どこにいった……)

放課後、鬼の形相で教室の前に居たのは別の話である。

その後、俺は強襲科に行かず校内を見てから寮に帰宅した。

「ーキンジ、あんた、あたしのドレイになりなさい！」

「……」

さて、今日は外泊しますかなつと。

「つて!?!助けてくれええ！」

「??……」

ちらつと、こちらを見た少女……あー、見た事えるけど知らないなー、なーも、知らない。

「……それでは、ごゆるりと」

と言つて、俺は姿を消した。

「え」

呆けた顔をしたキンジだが、許せ。

さーて、どうするかな……ビジネスホテルでいいかな……

そして、少年は街の暗闇に交わった。

残弾3

翌日、フロントで鍵を返し学校に行こうとしたが……

「あ、車のキー寮に忘れた……」

その場でorzの姿勢になったが、キンジに気付かれなければいいんだ……いや、待て嫌な予感がする……まあ、気にしないで行くか。

ソローリと、鍵を開け自室に迎えこちらのドアもソローリと開けて車のキーを見つけてポケットにしまった。

(よし、後は気付かれずに出て行けばいいや)

と考え、部屋を出たら声をかけられた。

「なんで、あんたが居るのよ」

「……(一一。㇏。㇏)」

なんでバレた!?!と、心の中で叫んだ。

「……貴女に、お教えする必要はお有りですか?アリア嬢」

「そうね……でも、私の邪魔はしないでよ」

「ご安心を、元より貴女様に害を及ぼす行為は致しませんので」

「そう……ここには、あなたの意思で来たの？それとも、命令？」

「そうですね……後者に近いと申し上げるしか無いと」

ああ！逃げたい逃げたいよおお！でも、逃げたら鉛球が飛んで来るんだろ……はあ、逃げたい。

「あの子の差し金ね……わかったわ」

「御理解頂けて、こちらも安心しました。ああ、それと学校内では私しからお声をかけませんが……よろしいでしょうか？」

「ええ、結構よ。ハミルトン」

「……私しの名前は、百地？です」

「そう、どちらでもいいわ」

「そうですか、それでは私しはこの辺で」

そう行つて、寮を出て行つた。

「あーあ、見つかつちやつたなあ……姉様は、怒るだろうなあ……はあ……」

ん？なんで、ため息つくかつて？そりゃ、家出ですよ。あの家は、俺を存在してない扱いをしたからだよ。理由は簡単、使えないからだよ。何がって？知らないよ、そんな

ん……だって、能無しですから。

「さーてと、お嬢様は家の奴らと呼ぶかな？ いや、呼ばないかな……」

さて、今日も頑張りますかな。

ああ、そうそう、その日の昼休みに鬼の形相をしたキンジが教室の前で待ってたのは言うまでもない。

——ここは、イギリスの某所である。姉であるアリアから、執事の居場所がわかったという一報が国際電話で届いた。

「そう……ハミルトンが見つかった……ありがとう御座います、お姉様」

車椅子に腰掛けた、少女は微笑みを浮かべ家出をした執事に思いを馳せていた。

「それで、ハミルトンはなんと？」

『何も言っていないわ、ただ、私に関わらないってだけね』

「そうですか……残念です……」

さて、どうやってこの家に帰らせる算段を考えていたら、パソコンの画面に『メールを受信しました』というお知らせが目にはいった。

(いったい何処のどなたなのかしら)

と、膨れつつメールを確認した。

「…………ツ！」

『ん？メヌ？どうしの？』

「いえ、お気になさらずお姉様」

メールの差出人は、彼女の弟であった人物。ハミルトン・ホームズだった。

(あらあら、やっと連絡を寄こしましたの……)

はあ……と、溜息をつき文面を見た。

日本の武偵高に通います。何時、そちらへ戻るかはわかりませんが、なるべく早くそちらへ、帰りますので家の者を寄越さないで下さい。

貴女様の執事 ハミルトンより

へえ……という感想しか、浮かばない内容だった。そして、何故他人行儀なのかは……まあ、反省してると受け取りましょう。さて、問題は何時帰ってくるか……曖昧なのですよ、それならいつそ、こちらから出迎えましょうかどう考えが浮かんだ。

「ねえ、お姉様」

『なにかしら？……まさか、こつちに来るとか言うつもりなの？』

「あら？何故、わかってしまっの？」

『そうね……大方、ハミルトンからメールが届いたんでしょ?』

「うふふ、正解ですわ、お姉様」

『だと思った。ハミルトン、少し青ざめてたから先手でも打ったのでしょ?』

「さあ?そこまでは、分かりませんわよ……だって、本人の声を聞いてないのですから」
うふふ、と薄く笑いながら電話をする姿は今、居ない人物への怒りがこもっていたのであった。

ゾクリと、悪寒がした。やばい、姉さんを怒らせたかと思考するのはメールの差出人、百地・H・?もといハミルトン・ホームズであった。

「……ああ、確実に怒ってるだろうなあ……」

そんな眩きは、誰の耳に届かなかった。

残弾4

数日が過ぎ、家の者の影や気配はなかった……だが、この日は大雨だった。

「なあ、キンジ時間大丈夫か？」

「え？……あ!!」

時計の針は、7時40分だった。

「つていう、お前は どうするんだよ」

「車があるからな」

「さいですか……じゃ、先に行ってるぞ」

そういつて、キンジは先に寮を出て行った。

「さて、俺も行くかな……」

傘をさして、駐車場へ……なぜか、先に出て行ったキンジが居た。

「お前……バスは？」

「乗れなかった……」

「そっか……乗ってけ」

「恩にきるよ」

車を走らせて、強襲科の体育館を過ぎたあたりでキンジの携帯が振るえた。

「電話か？」

「ああ……げつ、アリアだ」

「早く出ないと、どやされるぞ？」

「そ、そうだな……もしもし？」

『キンジ。今、どこ』

「強襲科を過ぎたところ」

『過ぎた？誰かと一緒なの？』

「あ、ああ」

『誰なの？』

「？だけど？」

『ちよつと、代わりなさい』

「？、アリアが代わって」

「……わかった、なにか御用ですか？」

『あんた、武偵ランクいくつ』

「……お教え出来ません」

『まさか、Eじゃないわよね？』

「はあ……^{ツアー}R Rですが」

『は？あんた、化け物？』

「いえ、規格外です」

『そう……あんたに命令するわ』

「……主からですか？」

『メヌ？ええ、そうよ』

「畏まりました。ご命令は」

『私のパーティーで、事件解決』

「御意」

電話を切って、キンジを強襲科に降ろし俺はある場所に向かった。

「あれ？ハミルトンは？」

「は、はみ？誰だそいつ？」

（あいつ……偽名、使ってたわねそう言えば）

「百地？は、どうしたの？」

「何故フルネームなんだよ……はあ、寄るところがあるって」

「そう……」

「それで、事件は？」

「ええ……」

「この後は、原作と同じなのでカットで。」

キンジ達が、現場に到着して数分後にハミルトンはついた。だが、武偵ではなく『死神』として。

爆弾解体中に、後方から爆発音が聞こえた。

「今度は、なに！」

アリアは、イラつきながら音がした方向を見た。そこには、白い仮面……というより骸骨の仮面をつけ、黒のコートを着た人間が素手で車を、破壊していた。

「な、なに……あれ……」

「なんでだ……」

バスの屋根から、キンジの呟きが聞こえた。

「キンジ！あいつの事、知ってるの？」

「いや……知らないが、だけど」

「なによ！はつきりいいなさい！」

「あいつ……なんで、それを……」

「だから！なんなの！あれは！」

「秋水……遠山家の奥義……」

「え？なんで、あんたの家の奥義を使ってるのよ！」

「知るかよ！むしろ、俺が聞きたいよ！」

「まあ、いいわ……」

2人が、話てる間何台もの車が破壊されていった。

「……」

「……化け物だな……」

キンジは、思わずそう呟いていた。

「誰が、化け物だ」

すると、今まで戦っていた奴が後ろに居た。

「え？」

「ツ！死神！なんでここに居るのよ！」

「いやいや、誰も殺ってないから」

心外だ、という声で反論してきたが、キンジは疑問をぶつけてみた。

「な、なあ、なんで俺の家の奥義……使ってるんだ」

「ああ、それはいづれわかるさ」

「はっ。」

という声は、虚しく誰の耳に届かなかった。

残弾5

死神……悪事を働く人物に対して鉄槌を下す……まさに、正義の味方という感じなのだ、それは文面上での話である。事実、そういつた行ないをした奴らの末路は悲しいものだった。ある者は、自身の性器を切られ手足には、杭が打ち込まれ見せしめとなった、また、ある者は、快楽のため殺人をし逃亡したが翌日『正義の名の下に』という書き置きの横に刃物での切り傷と手足に杭を打たれていた。なお、致命傷を避けての切り傷だったため、精神的ダメージもあつた。その結果、各国はあまりにも残虐であり非人道的であるため国際指名手配になった。

「マジかよ……」

年齢・性別など、死神の情報は少ない……いや、少なすぎるのだ……まるで、その後のろに大きな何かが情報を操作している様に感じる。

知ってしまったら、後戻りできないぞという脅しがあると錯覚してしまう程に。そして、その人物が目の前で戦っている。しかも、笑いながら。

「く、狂ってる……」

隣で、アリアが青ざめながらそう言った。

「あ、アリア。爆弾は、どうなった？」

「え？あ、もう解除してあるわよ」

「流石、Sランク武偵様……さて、車止めるか」

「ええ、そうね」

「それじゃ、先に中に入ってる」

「わかったわ」

先に中に入って、武藤に爆弾が解除された事を伝えバスを止めてもらった。

だが、アリアが戻って来なかった。嫌な予感しかしなかった。バスを降りて、アリアを探そうとしたら大声が聞こえた……アリアのな……

「止まらなさいッ！死神、あなたを国際指名手配として取り押さえます！」

「……」

ジロリと、アリアの方に向きしげしげと観察？をした。

「テ……ート」

小声で、何かを呟いた瞬間……消えた。光の残留を残して居なくなつた。

「え……」

誰が、呟いたのか今はどうでも良かった。ただ、目の前で起きた事に混乱するばかりであった。

「れ、レキ……あいつは、何処に……」

『すみません……私の視界外に出たようで、ロストしました』

あのレキが、悔しいという感情を孕んだ声で報告してきた。

「そうか、わかった」

この日、各国には死神は超能力者であるという情報が文面で渡った。だが、日本では、超能力者であると共に日本人である可能性があるという疑惑も浮上し、国会の悩みの種が増えてしまい頭を抱えるしかなかったのであった。

——キンジSide Off——

俺は、アリアを見て強くなる兆^{きざ}ありと確信し、そして、俺を殺^{ころ}せるであらうと思っ
た。但し、キンジと一緒にならなと思^{おも}いある場所にレポートしたのであった。だが、こ
の行為が自分の首を絞める事になるのは各国に情報が入ったよ^よくもだった。

お詫びと報告

どうも、禾口爻です。今回、お詫びと報告としてこれをアップしました。

えーっと、まず報告の方からで……ここ最近、自分の作品を読んで「なんか違う」「こ
うじゃない」となり、設定やストーリー内容がペラペラであると思い、未完とさせても
らいました。事実、話を重ね書き始める時に「どうしよ……」と悩んでしまったり、ノ
リ……というか頭に浮かんだのを書いてしまったりしました。

そこで、未完で終わらせリメイクとして新たに書き始めようとなりました。題名は、
変わるかはその時次第ですが、オリ主やオリキャラ、ストーリーの案を練っていきます。
続いては、お詫びなのですが……申し訳ないです。お気に入り登録して下さった、2
5名の方、投票を下さった *tadamaro* 様……誠に申し訳ございません。

次に、いつリメイク版を出すか……実は、リアルがクソ忙しく（免許証を取るが、大
変で2回も落ちたため）現在、絶賛勉強中です。ゴホン、んなこと良くて（良くないけ
ど……）リメイク版は、来月以降に案が固まり次第随時、更新します。曖昧で、すみま
せんね……

来月以降になるのは、免許証以外に頼まれごとがありません。そっちも片すのに、時間

がかかりそうなので……まあ、作文なのでサクツと終わらせれば良いのですがね……免許証がガチで、やばいです。ええ、親にも早く取れと言われましてね（▽、*）アハハ作文より、免許証が大切なのでそっちに時間を割いてるのでね……え？今は大丈夫なのかって？大丈夫じゃないです。（ ⊠—⊠ ）

まあ、頑張つて勉強しなければいなのですがね……欲つて怖いわーつて感じましたよ。

さて、こんな感じで更新が出来なくなり書いた物に納得がいかず、新たにリメイク版として上げようとなった哀れな作者ですよ……一応、物語の始まりは理子&アリア+のキンジVSブラドのどこか、シージャックどつちかで始めようと”頭の中”を考えています。そして、主人公……とかオカリ主は、感情が希薄で行こうと考えています。もち”頭の中で”……武器は、対物ライフルを装備になります。これは確定です。容姿！髪の色は、緋弾を撃たれる前のアリアの色です。で、ふつめです。身長とかは、細かく決めて無いです。一応、言つとききます。男の娘ではありません。設定としては、アリアの双子の弟……だが、産まれて間もないときに誘拐……とうか拉致にあう感じですね。そこからは、シャーロックに助け出されるかシャーロックが攫つたか、悩み中です。

そんな感じでやっていきます。

では、リメイク版でお会いしましょう。では、また！